

## 乳がん検診（巡回）

### 動 向

視触診検診の受診者数は県域では544名、横浜市では869名の増加となった。

県域部の検診は当協会が事務局を引き受けている「神奈川県乳がん集団検診協力医療機関連絡会（会長＝福田護・聖マリアンナ医科大学乳腺内分泌外科教授）」の指導により遂行されている。同連絡会は「県成人病検診管理指導協議会乳がん分科会（会長＝同上、事務局＝県福祉部高齢者保健福祉課）」の指導のもとに運営されている。

横浜市より受託の検診は「横浜市乳がん検診協議会（会長＝土屋周二・横浜国立大学名誉教授）」の指導のもと、市衛生局ならびに各保健所と協力して検診を実施している。

横浜市のマンモグラフィ検診は、50歳以上の週数年齢者に対し市内で装置を有する医療機関で実施されており、集団検診においては、視触診による検診を行い市内のマンモグラフィ実施医療機関を紹介して、受診をしてもらうシステムとなっている。

なお、当協会は総合判定機関として、マンモグラフィの二重読影と総合判定業務を受託して、検診の精度管理向上の一翼を担っている。

14年10月に導入された検診車によるマンモグラフィ併用検診は、15年度は大磯町、藤野町の2町で実施され221名が受診した。

受診者総数は県域では昨年よりも増加数が大きくなり、横浜市では昨年は大きく減少したが、やや戻ってきている。県域では初診者も再診者も増加し、横浜市では初診者のみが増加し、再診者は殆ど変わらない。年齢分布は県域では30歳台がやや増加し、50歳以上が大幅に増加している。横浜市では前年とほぼ同じで50歳以上の受診者がやや少ないのは、マ

ンモグラフィ併用検診で受診者が偶数歳に限定されているためであろう。県域でもマンモグラフィ併用検診車が導入されたが、大磯町、藤野町のみの221人で影響は少ない。要精検率は初診者の増加分だけ上がっているように思われる。精検受診率は毎年同じで、県域が横浜市より10%少ない。癌発見率は、県域が0.09%、横浜市では0.17%と初めて差がでたが、原因は精検受診率の差より、横浜市ではマンモグラフィ併用検診が軌道に乗ったためとも考えられるが詳細な分析を待ちたい。年齢分布では癌発生率の最も高いとされる40～50歳台の受診率が低く、実際に検診に従事していて、この年齢層が乳癌に対する関心が低く感じられる。癌発見率に関しては、現在マンモグラフィ併用検診の導入の過渡期で精検結果の未把握が多く、精検結果を早く確実に把握する方法が緊急な課題であろう。まだこのデータでマンモグラフィ併用検診の成果云々の十分な時期ではないが、着実に上がっているように思われる。しかし乳癌検診受診対象者の20%以下の受診状況を改善しなければ、大きな成果は期待出来ない。昨年よりメディアによるマンモグラフィに対するキャンペーンといった良いくらいの取上げにより、乳癌に対する関心が大きく高まってきていることは確かで、当協会のマンモグラフィ併用検診車の需要は16年度は満杯で、これからは各地方自治体の取組は勿論、われわれ検診施行機関側の体制整備が早急に求められる。

関係の集計表は89頁に掲載